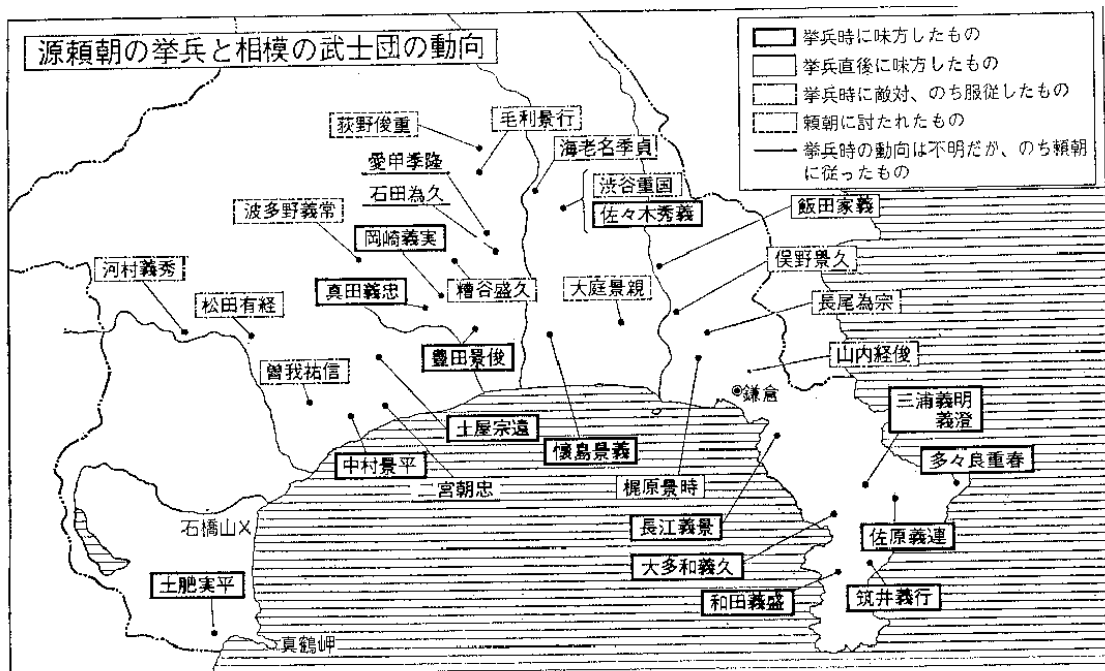


酒匂川と足柄の歴史（3）

新松田から足柄高校へ向かうバスは、新十文字橋で酒匂川を渡ります。この時見える景色はどの方角を見てもとても美しく、晴れた日は特に心を洗われた気持ちになります。酒匂川上流方面をみると、山北駅などのある山北の中心地は、二つの小さな小山に隠れて見ることはできません。この二つの山は、向かって左側が浅間山、右側が丸山です。丸山の頂上には「TOYAMA」という会社の事業所があります。浅間山の方は、河村城址ということで公園などがあります。

今回は足柄地域に、河村氏などの「武士」と呼ばれる地域のボスたちが生まれた時代について書きたいと思います。歴史で平安時代については習っていると思います。京の都に貴族階級が形成され、大きな仏教寺院がつけられて僧侶が力を持っていました。天皇中心の政権は形骸化して、地方の農地は都から派遣された役人が管理する公領か、貴族や寺院の私有地である荘園となりました。その農地を管理する立場にいた人たちから、のちに武士といわれる階級が生まれてきます。地域のボスのような存在で、武装して戦うことを次第に本業とするようになり、また血縁を重視して一族で支配地域を固め、婚姻によって勢力を拡大したりしていました。

足柄地域の武士としては、山北の河村氏、南足柄の沼田氏、松田の松田氏などが知られていますが、これらの武士は秦野の波多野氏の一族だと言われています。神奈川県西部には他に、平塚から湯河原あたりまで勢力を広げていた中村氏（土肥氏、岡崎氏、土屋氏、二宮氏、真田氏などが一族）がいました。



永井路子「相模のものふたち」（有隣新書）より

都では平氏と源氏という二つの武士団が対立し、一度は平氏が政治の実権を握りますが、その後源氏が盛り返し、源頼朝が鎌倉に武士政権を建てました。鎌倉幕府です。平氏によって伊豆に軟禁なんきんされていた源頼朝の挙兵きよへいを助けたのが中村氏で、逆に平氏の命令で源頼朝と戦ったのが、波多野氏の一族です。

最終的に源氏によって平氏は滅ぼされますから、波多野氏とその一族も衰退すいたいしていきます。そんな中で山北の河村氏の当主義秀よしひでについてはこんな記録が残っています。源頼朝に敵対して敗れた河村義秀は、大庭景義（景能）に預けられ斬首を命じられたが、景義が密かにかくまい、10 数年後の鶴岡八幡宮の流鏑馬やぶさめの神事しんじのおりに、急に出られなくなった射手しゃしゅの代役として弓を引いた。その見事な腕前うでまえをみた頼朝は河村義秀を許し、山北の所領しよりょうも元に戻した…。

ところで、このころの武士たちの拠点きよてんとなった場所を調べると、どこも現在の市街地からは離れた台地のうえや山の斜面にあります。当時平野は、まだ河川の治水が発達していなかったので、人が住んだり水田を営むには危険が多かったのです。そのため、武士だけでなく農民たちも台地の上や麓に住み、水のコントロールがしやすい場所だけを水田とし、傾斜地で畑作をするのが一般的だったと考えられています。また、以前怒田や沼田の地名について説明したように、丘陵内のくぼ地や沢沿いなどの沼地も水田として使われていました。

そんな環境の中で、武士たちは防衛的な意味で、背後に山を背負い、井戸水が得られ、見渡しの良い場所に館やかた（城）を構えました。山北の河村城址からは、足柄平野が一望できますし、一族の松田、沼田氏の拠点も視界に入ります。また、酒匂川に沿って内陸部にいくつか見張りの館をつくって、背後から敵が攻めてきたときには、「のろし」を上げて知らせるようにしていたこともわかっています。さらに皆瀬川みなせがわは現在とは違って、山北の市街地中央付近を東にながれていたため、河村城は二つの川に挟まれた要害ようがいの地だったのです。

河村氏をはじめとしたその頃の武士たちは、戦のないときは地域の開発者として、農民を集めて土手をつくったり、水路を掘ったりして農地を少しずつ増やし、足柄平野は徐々に水田化されていったと思われます。しかし前回書いたように、酒匂川は暴れ川でしたから、そんなふうの開発された農地を何度も何度も洪水はかいで破壊し、そのたびに人々は農地を再整備していきました。